
やりすぎの転生者

carzoo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

やりすぎの転生者

【著者名】

N-ONE

【作者ID】

carzoo

【あらすじ】

やりすぎた少年は、転生して、何をするのか。

プロローグ（前書き）

どうもテース。よろしくおねがいします

プロローグ

プロローグ

大嵐冬斗です。早速ですが、わたくし……死にました
頭イタイ人だとか思わないでください……マジドす！マジなんぢかー。
それでいま…
創造神と名乗るオッサンが土下座しておや…

「じーすりゅーいーのよ…」

俺は窓を見上げる。

「ああー、窓が白いなあー」

「いじめんなさいこいじめんなさいこいじめんなさいこいじめんなさいこ…

「うぬせえええええええええ…」

「グハアツ！」

「せつしきから！」めんなさいこいめんなさいつむせえよつ…つーか何
で俺死んだんだよー！」

「オオツー死んでおる」と理解しておるのかー…ならば話は早い…」

「イヤ、お主の死に方があまつにもかわこやつでのう」

かわいそつ？

「どんな死に方だつたんだ？」

「じりせ氣になるとじるだ

「わしが隕石打つたんじや」

なこい！？

「なんじりつたクソ野郎……」

嘘だああああつ！

「ぞ、残念ながら事実じや」

は？（。）はあ！？（。）

「ふやけんじやねえー」のクソジジイイイイイイイイイイイイイ

「お、落ち着くのじやー！」

「これが落ち着いてござれるかー」コトアー

「お詫びにチートな能力付けて好きな世界に行かせてしまつ（コトア）で落ち着くか？」

「わつとやれー」

「つむ、分かればよこ（す）」豹変ぶつじやのつ）われでは生きた

い世界は何処じゃ？

「ムフフ、」「いやもうめだかボックスしかないっしょー。

「フムフム、めだかボックスか、よからう」

ヨツシャアア！

「わざと能力を決めてしまつてくれ」

ん~、能力があ~、別にめだかボックスだとあ

「過去の設定、俺だけの異常と過負荷くれ」

「説明中、しばらくお待ちください~

「それってかなりチートじゃないかの?、しかもエグイシ

いいじゃん~どひせだから思いつきりチートにしたいんだよ~

「フム、その気持ちは分からんでもないがの?。それで最後かの?..」

「あとはもうだな~、あ、そうだ! サッカーの設定残しどって。」

「よかう~」

「では、お主は箱庭学園の生徒で、住む所は箱庭学園から近いところにしておくからの」

「お~、サンキュー」

「ハア…、まあいい、それでは送るぞ～。じゃあの～

俺の下の地面が無くなつた

「おいー・ちよつとまでえええ！～」

「箱庭学園の入学式の二日前じゃからの～」

「このクソジジイイイイイー！次会つたらぜつて一ボコるからなあ
あああああああ…………

そして俺は意識を失つた

「あつヤバ間違えて〇歳からこした。まあいつか

そんな神のふざけたこえがきこえたきがした。

プロローグ（後書き）

お初にお会いになりますから、よろしくお願いします。これからがんばります。

主人公設定（前書き）

申し訳ない！間違いがあつて修正しました。

×
2

主人公設定

主人公設定

名前 大嵐冬斗

おおあらしむと

設定（めだかの世界、ほんとの世界は普通なため）

幼いころに箱庭総合病院にいき、球磨川、めだか、善吉に会うその後の診察中に黒服の男たちに連れられ病院の地下で人体解剖実験の実験体にさせられる、と同時に親に捨てられ一人暮らしを始める。

中学のころに安心院なじみに会い、球磨川と再開し、名前で呼び合う中に、古賀と名瀬は中学のころに車でひかれそうなところを助け好意を持たれている。本人は気づいてないなぜなら古賀と名瀬に会うのは言っていたが別に恋愛フラグを立てるなどいわれていないので神が勝手にやつたから。あと、これも勝手にやつたことだがいろんな人からもてる。サッカーが得意で大好き。中学のころ日本代表（現実でもそうだった）クラブチームに入っている（でも本編には出さない）

全員、記憶のプロテクトをかけ、解かないと思い出せないようになつている。

容姿

顔は上の上（前世から）

目は黒く髪は赤い

身長

168cm 体重56kg

性格

普通であつて戦略的、基本的に人が嫌い。

能力

異常

1・

オールアルティメット
完全究極

思ったことを究極にこなす能力。主に人の能力を使うときに発動される。

例

相手の異常をコピーして自分の思ったものを付け足す

- 2・ドリームオブドリーム

夢の夢

他の漫画の技や、自分で考えたことなどを確実にできるようにする

- 3・パラレルエンベラー

神の皇帝

自分の身体能力を何倍にでも引き上げる能力ただし10倍を超えた
らからだがこわれる

過負荷

- 1・ゼロタイム

無の時間

全ての時間を操作する

- 2・ペインドレイブ

吸収苦痛

他人の痛みを吸収するさらにほかのものに痛みを操作して押し付けることが可能

- 3・デスペラード

绝望

相手に黒い波動を放ち当たつた相手は冬斗と自分の絶望の記憶と痛みを与える（後で発覚し、安心院に取られている）

初登校

初登校

なんだかんだで、俺は箱庭学園入学式の日を迎えた

神の阿呆が0歳から始めさせたせいで長時間がかかった。まあ能力慣れしたからいいけど

「ふああー、寝みー…」

ネットやら何やらあんまり寝てねーんだよなー

移動中

「おお！これが箱庭学園か！広いなー」

ちなみに今はまだ早朝なので登校している生徒は少ない
今のうちに決められたクラスに行つちまおう、混むと面倒だし…
おれは一年一組か…まあこの世界に来てからまだ誰にも異常見せてないからなー（見せた奴は全員殺した）、当たり前か…ん？おお！
あれは主人公の一人の人吉善吉じやん！さつそくエンカウントとるぜ！

「おーい！」

「ん？ 何か用か？」

「お前も一弾一組か？」

「ウニバーサル・マガジン」

卷之三

おニ おれは力屋冬シが三日

「アーティストのためのアートマーケット」

卷之三

モニタナ「.....」

不良に絡まれた。

「せせ田金」

娘たれ
ががてきがひ

そういうて不良は飛び掛つてくる。毎度毎度、馬鹿な奴だ。

「無の時間」ゼロタイム

そういうつて、相手の動きを止める。そして、日本刀を差して消えた。消える直前、不良がこんなことを言っていた。「化け物が」つとそれと答える。

「俺はなんの長所も無い普通で普通な《通常》ですよ。ちよつとサ
ッカー好きのね それじゃ、また今度」

翌日、近所で不良が死んだというニュースが流れていった。

第4話 生徒会選挙（前書き）

ど～もで～す。れふうはもひ～、お詫びしあしま～す。

第4話 生徒会選挙

第4話

生徒会選挙

さて今週から生徒会選挙だ ん? 時間飛んだつて?

だつて学園生活つて毎日毎日同じようなことばつかなんだよ(主に)

不良殺し)

あ、途中から不知火入つてきたけどな
おーあれば!

「おーい、善吉ー何やつてんだ?」

「見りゃわかるだろ、選挙活動だー!」

いや、見りゃわかるけどさ…

「じゃあお前、生徒会選挙出るんだ

「ちげーよ、あいつの手伝いだ」

「あいつ? ああ、あの完璧超人か

でもあるお嬢様と善吉つてどんな関係なんだ?」

「ただの幼馴染だ。っち、前はもう一人いたのに……(ぼそ)」

「あー、不幸なことでへえ、まあ頑張れよ。じゃあまた後で

「おひ、じゃあな」

そしてホームルーム前

……おいおい、いくらなんでも遅くねーか？もうすぐ先生来るぞ

ガラツ！

「冬斗！…俺まさか遅刻か！？」

「いや、ギリギリセーフだ「キンローンカーンローン」ほらな？」

「た、助かつたあ」

「にしても遅かつたなんがあったのか？」

「あのお嬢様の無茶ぶりに最後まで付き合つてたらこいつなった」

「あー、それ以上言つなんとなく想像つくから」

大変だつたんだろうなー

そして選挙結果発表当田

ん？またかなり時間飛んだつて？だから学園生活つて書くことない
んだつて

「それでは、生徒会選挙を発表します。生徒会長に当選したのは…

……支持率98%で1年13組の黒神めだかさんです」

まあそりやそーだろー、だつて

「貴様達の悩み事は私の所有物だ。ひとつ残らず私に貢げ！…だぜ？」

クックク、今思い出してもおもしれー
つーことは明日は全校集会での演説か…、楽しみだなー

いづして生徒会選挙は終りを告げた。

あっちなみに今日も近所で不良の死体が発見された。

第4話 生徒会選挙（後書き）

れあ、どこでん行くだぞーーー！

原作?どうやって介入する?

原作?どうやって介入する?

さて、原作介入の仕方として現在思い描いているのは、風紀は味方、
フラスコ傍観、過負荷は敵。

まあ、この方法で行けば、自分は、大いに楽しめるだろ?う。

時は変わり

あれはめだかと人吉じゃん。の方角は剣道場だから…………

めだかと人吉を尾行中

ガラッ

「あ?誰だアお前ら」

「1年13組生徒会執行部会長職黒神めだかだ
目安箱への投書に基づき、生徒会を執行する!」

「あー聞いてんぜ!今をときめくイカれた新会長つて奴だろ?」

こんなところでお出でになるとは驚きだな！

支持率98%だか何だかしらねーが、生憎俺らは残り2%の方だぜー！

おいおい、アンタらもめだかの噂は聞いてるだろ？
なんでビビらねーんだ

すげーのか世間知らずなのかどつちだ？（今は物陰に隠れて傍観中）

「貴様がリーダーの門司3年生だな？」

剣道か、懐かしいぞ。私も昔少しだけかじったよ。
この木刀もよく手入れされてある。黒檀とは随分と張り込んだものだ

「！？（え…あれ？）いつの間に取られた！？感覚どこりか気配もし
なかつたぞ！？」

無刀取りって……かじった程度じゃできぬよ
もはや奥義だそれは、俺もできないことは無いが

「かつ囮め、おめーら…」

「おつおつ…」

めだか相手じや囮んだって意味ねーよ。歯痒いな。

「……制服改造に染髪、装飾……

校則違反のオンパレードだな

まあ、私もあまり人のことは言へんが

確かにってかめだかが着てるあの制服つて制服改造で校則違反じやねーの？

あ、分身の術もどきだ

「なつ何イイイイ！？」

つーか残像が見えるつてどんだけ早いんだよ。どこかの、ボトさんもびっくりだぞ。（残像は生身の人間が出すこと）是不可能です

「それでもタバコだけは控えておけ。貴様達の健全な成長を阻害するし

何より将来の楽しみがなくなるぞ！」

「え…オレのタバコ！？」

「な…何だ今の！？」

「忍法か！？」

……うん、「忍法か」といつた君、君の眼は正常だ
あれは一般人の目には忍法にしか見えん
ん？俺？俺は見えたぞ。しかもバツチリ
あの程度なら俺でもできる。動体視力は、たいタツのおにがスロー
で見える感じだ！

「しかしまあ、荒れ放題だな

よくもここまで学園施設を荒廃させはるものだ
逆に感心したくなる」

生徒会長が感心してビールするよ

「なつなんだよセツキヨーかよ！」

「お呼びじやねーんだよ会長さんよおー！」

「いい気になつてんじやねーぞコリマーーー！」

剣道部の皆さんが、非難の声を上げるが、もつ遅い。あれが出来るか？

「哀れなことだ」「

ほら来た。くくく…

「！？」

「貴様達もかつては真っ直ぐな剣道少年だったに決まっている何か重大な理由があつて挫折を経験し道を踏み外してしまったとしか考えられん」

うわーお、相変わらずとてもない勘違いぶりだな、おい普通はそんな考え方できねーよさすが『上から目線性善説』誰にもまねできねー。よくあんなのとずっと一緒にいるよな善吉。

「親に見捨てられたか？
良き師に出会えなかつたか？
友に裏切られたか？」

いつも思つけどなんでいちいちポーズとるんだ？なんかむかつく

「安心しろ、私が貴様達を更生させてやる！
剣の事以外何も考えられないようにしてやる！」

それって不味くね？精神科連れて行かれるぞ

「矯正してやる、強制してやる
改善してやる、改造してやる」

いや、強制と改造は絶対ダメだろ めだかって時々危ない発言する

() こつが言へる事ではな

「一度どだいじょひなじと考へぬよつ泣いたり笑つたりできなくしてやる」

いやだから精神科連れて行かれるつての

「まずは素振り1000回からだ！」

貴様達、今ほれりて歸れるや思ひなむ。」

「ギヤアアアアアアアア」

不良達のゴミ福をお祈り致しますアーメン（俺は、キリスト教じゃねエゾ）

数時間後

「も、もうだめだ
「体がピクリとも動かねー
「し、死ぬ」

ずっと見てたけどやー、あれはきっとなんでもんじゃねーよ
よく生きてたなアイジーリー

「それで、いつまで隠れているつもりだ？大嵐同級生」

おー。やつと出番かー。田立つてやうやく。

「？」、「？」

「…………こつから気が付いてたんだ……？」生徒会長

「善吉と共にここに向かっているときから誰かに尾行されている気が配はしていたまあ、半信半疑だったがな」

「へえ、じゃあ確信したのは？生徒会長。黒神めだかさん？」

「確信したのは門司3年生達のタバコを取った時だその時に貴様の姿が窓に映っていたからな。」

「さすが生徒会長、お見事ですじゃあ用も済んだし帰らせていただきますよ」

「まで、貴様の用とはなんだ？」

「んー、なんて答えようかな」 じーはかつ じょく……

「今後、計画に支障が出ないかどうか確かめるためですかねイマのあなた方程度じゃあ障害にならないことが分かりました それじゃあまた」

「あーおーーー」

後ろでなんか言つてるけど聞こえないフリ

こうして原作介入1田田は終わつた

今日は、不良に会わなかつた。つち残念だ。

あれ？ やりすぎた？（前書き）

主人公がやりすぎます。

あれ？やりすぎた？

あれ？やりすぎた？

剣道場

ドガツ バギツ グシャツ

只今日向君が剣道部相手に制裁という名の暴力を下しています
でもこれなら全国レベルだって言う不知火の情報も頒けるな。俺の
ほうが強いけど。

「つたくよ～、高校ではいっ子ちゃんと通したかつたんだけナ～」

「だ……誰だお前……？」

「僕？僕は真面目な一年生ですよ」

真面目なら暴力事件おこさねーけどな

「真面目に剣道がしたい、真面目で真面目な男です
だけど聞いてくださいよ！僕団体行動とか上下関係とか苦手でし
てね

先輩とか顧問とかと揉めて、いつもボコッしゃうんですよ。そ

れで試合出れねーの

田向……それはお前が悪い
つか我慢しろよ

「う……それで、剣道部が休部中のこのガツコに来たってわけか」

いや部員一人じゃ試合とか出れねーだろ

「ピンポーンー」こーでなら一人で好きにできますからね
でも計算外、剣道場には招かれざる先客がー。
そこで例のバケモン女こと生徒会長に草むしりをお願いしたんですけど

うまく事が運ばねーもんすねー

あ、助けを期待してんなら無駄ですよ

あの女、今頃役員募集演説の真っ最中ですから

残念ながらここに一人助ける人がいるんだよなー
まあ、俺だけど（笑）。やりすぎるけど（笑）

「しつかし、ここをキレーにしてくれたのは助かつたかな?立つ鳥
跡を濁さずつスね」

うん、確かにキレーだ

「ま……待てよ。勝手なこと呟えてんじゃねえよーー!
たつた今思い出したわ
俺は昔剣道少年だつたんだよーー!」

それって本当なのかな

どつでもこいか

「俺も……」

「俺もだ……」

「俺なんか日本一の剣士を目指してた……気がする」

気がするだけかよーーー！」

「…………うつぜえ！」

「…………ロップアウトした奴が簡単に改心して立ち直りたいといへんじゃねーよ！
剣道三倍段つて知つてつか！？僕はあんたらの三倍強いつて意味だ！！」

「…………俺としたことが感情を出しそつとなつた。つま、行くけど。
ガシツ！」

俺が木刀を握る

「もうそこいら辺にしたら、田向君？」
「つー？邪魔すんじやねーよーーー！」

日向が木刀を横なぎに振る

それを俺は某、超が口癖の学園都市の住民の室素装甲オフショーンスキンスティングで防ぐ
そして俺は日向の腹に神の皇帝で強化した蹴りをする
さらひ日向が怯んだすきで回し蹴りを食らわせふつ飛ばす

「オイよく聞け日向、お前も暴力事件のこじてる時頃でドロップア
ウトしてんだよ。だから……」

「つー？う、うるせえ！！

お前、剣道三倍段つて知つてつか！？」

ドガツ

俺が右足を日向に叩き込む

「しらねーよ！！カス！！」

「ぐ……が……あ……」

さて、用も終わつたし帰るか
そういうえば、人吉来なかつたな
まあいいか、面倒だし

「おい、お前……なんで俺らなんかのために……」

うーん……なんでつて言われてもなー
原作介入したいからなんて言えないし

「ん？なんとなく、俺はただただ、ここに通りかかった箱庭学園の
規格外だぜ。」

我ながらかつこいこと言つたなー

このあと日向はめだかに更正されるんだつたな

日向尾行しよ。つつーか歩けるんだ。

尾行中

「くつそ、大嵐の奴！あんなにつえーなんて聞いてねーぞ
なんで十一組じゃねーんだ！？つてか、もう13組だろーー！」

だが、絶対にこのままじゃ済まされないつかギッタンギッタンにしてやるぜーー！」

「まあ、そんなに荒れるものではないぞ？田向同級生」

ああ、田向……どんまい……

「せつ生徒会長ー？」

「なななつなんでつ！役員募集会はどうしたんだよー？」

「問題ない。ちゃんと代理を置いてきた」

不知火が……巻き込まれたな

「それで……また覗き見か？大嵐同級生」

「あちやー、またばれちゃいましたか、こうなりや次からは奥のてつすね」

「ひいー！おっ大嵐！？」

「ふむ、その怯え様だとこいつにしきつにお灸をすえたようだな」

「ええ、あなたの教え子の剣道少年たちを虐めていたのでもう帰りますわ
じゃあ、部活に入つてないのでもう帰りますわ
あと田向…まあ…頑張れよアーメン」

俺は十字架を切る

「？」

そして俺は帰宅した。不良と喧嘩マフィア殺して。

「さて、貴様への話の続きだが」「なつなんだよー！利用された仕返しでもする気かよーー！」

「利用も何も生徒会は『ご利用いただくためにある
これからも大いに活用してくれてよいぞ

貴様に会いにきたのは単なる別件だ

『「クラスメイトの日向君の性格が悪そなので治してあげて』』

「だそうだ」

「しつ不知火イ！」

「哀れなことだ

貴様もかつては天使のように純朴な少年だったに決まっている
不幸にも愛情に恵まれなかつたが故にそんな独善的な性格になつ
てしまつたとしか考えられん

安心しろ！一度と悪だくみなどできないうこの私が徹底的に可
愛がつてやる！－－

「（大嵐が言つてた頑張れつて）ことだつたのかアアアア－－
ギャアアアアアアア……」

その日男の悲鳴が町中に聞こえたといつ……

「（日向、ドンマイーー。）」

翌日

原作通りに剣道部は日向が指導を務めている

「べつ別に、あの女に言われたからじや……」

……シンテレン

そして人吉も生徒会に入ったようだ
さて、次に介入するのは……

うーん、しばらくは普通の依頼ばつかだからな

となると……鍋島先輩の次期部長選びのとこか

あそこで阿久根高貴が初登場なんだよな

よし！次はそこで介入しよう！

なぜか鍋島先輩に、目えこないだつけられたし！

あれ? やつすぎた? (後書き)

今日の質問

皆さんの好きな歌は何ですか?

第7話 阿久根VS冬斗

阿久根VS冬斗

やつと阿久根高貴初登場の日が来たよ
いやー長かった！

さて、柔道部の見学っていう形で行こう！うん、それで行こう！
鍋島先輩とも顔見知りだし大丈夫だよね……一回しか会ってないけど…

じゃあ行こうっと

にしても柔道場でめだかに勝負挑もうかな？
でもな、ここで勝つと要注意人物としてマークされそうだし…
どうしよ…。そういうしている内に着いてしまった

俺が入つても気付かずに柔道を続けている

好都合だ、このままめだかと人吉が来るまで誰も気付くなよ…

「ん？ おお、冬斗クンやん。久しぶりやね。」

気づかれたし！しかも覚えてたし！なんで覚えてんの！
覚えていると思っていた俺が言つのも何だけどやあ！

「お久しぶりですねそう言えば、鍋島先輩は柔道部の主将でしたね、
といふかよく覚えてましたね」

「よく言つわ、まったく隙を見せなかつたやん柔道部になんか用か
？」

「ええ、柔道界のプリンスいや、破壊臣と謳われる阿久根先輩を一
目見ようとね…」

そり…、かつて中学時代に破壊臣と言われ、球磨川の指示で黒神めだかを破壊するも、めだかがあまりにも抵抗せず阿久根の立場が悪くなり、人吉等に報復されそうになるが、めだかに救われてからは敬愛するようになる。俺から見たら嫌いな奴だ。

俺は今回、その破壊臣の実力を見に来たのである

まあ、柔道の実力だけな

お？人吉達が来たみたいだ

「じゃあ、ウチは用事があるからまた後でな」

「分かりました」

さて、見せてもらおうか？破壊臣の実力を

さて、阿久根先輩の実力を見に来た俺だが…

「ふん！相変わらずめだかさんの足を引っ張ることに精を出しているようだな！」

だがいくら虫とはいえ君ももう高校生だ

大きな岩の下に潜んでいた虫の習性は分かるが、そろそろ独立立ちすべきじゃないのかい？」

「…独り立ちで来てねーのはどっちですか

何もできない？変な変態をめだかちゃんに近づけないくらいのことは出来ますよ？」

……何この空気？

どんだけくどくどぶちぶちいってんだよ。むかつくな

そしてめだかは柔道部員相手に無双中……

やっぱ勝負挑んでみようかな？つま、まずは、この一人を片付けないとな。

「おーおーお前らくびくびくびくび、馬鹿みたいに言い合いでんじゃねえよ。気持ちわりい」

「なんだい？君は、もしかしてそこの虫の仲間？」

「つは、ンなわきやねえだろ。俺はただあんたらがうぜえからとめにきただけだ」

「冬斗、お前一体どうやつたらいくと行くとこにくるんだ？」

「つまいじやねえか別に」

「にしても、それに比べたら凡人のクセに天才に付き従つとうジブンのほうがよっぽどスゴイやんなあ？部活荒らしの人吉善吉クン？」

「へえ、最近噂の部活荒らしつて人吉だつたんだ でも鍋島先輩、

人吉のことえらく気に入ってるようですね」

「（冬斗変わり身早！）」

「うん！人吉クン見たいながんばり屋さんがうちはめっちゃ好きなんよ」

「へえ、鍋島先輩つて人よしみたいな人がタイプなんですね
そうだ！阿久根先輩、人吉が会長のそばにいるのが氣に入らない
のなら勝負したらどうですか？」

人吉が勝てば今まま生徒会にいて、阿久根先輩が勝てば人吉は柔道部の次期主将になり、阿久根先輩は生徒会に入る、というのはどうでしょう？阿久根先輩も人吉に実力があれば文句ないでしょ？

どうですか？鍋島先輩

「うちはそれでかまへんよ」

「僕もそれに賛成だがハンデをあげよう
僕が十回取るまでに君が一本でも取れたら君の勝ちでいいよ」

「だそうだ人吉、頑張れよ」

「ええ！？これって拒否権はないのかよ」

「それじゃあ一人とも準備してきてください」

お、めだかが帰ってきた。どうやら終わったみたいだ
柔道部員たちは…ボロボロだな

「会長、お疲れ様です」

「ん? 大嵐同級生かいや、そんなには疲れていない」

まあ、そりゃあそだらうな

バケモン
天才だし

俺もだけど(笑)いや、俺は規格外か
準備ができたみたいだ

「それでは始め!」

ドンッ

は、早いな一本取られるの

「人吉君、君には何もできないというのは訂正しよう。

君のその努力と根性は認めよう
だが、それだけでは僕には勝てない」

その後も原作と同じく人吉は阿久根からは一本も取れず九本目まで
取られてしまった

「(人吉の氣力が尽きかけてるな
といふことはめだかの応援はそろそろか?)」

「人吉、私は如何なる場合においても決して私は貴様に勝てとは言
わない」

つてもなあ、これって本当に勝てるのか？

「だから勝つて！！

貴様がいなくなつたら私はすぐ嫌だぞ困るぞ泣いちやうぜ！」

う、うわあ

これが黒神めだかの真骨頂その一、『ツンデレ』か……
生で見るのは初めてだが、ほんとにいつもとキャラが全然違うな
阿久根と鍋島先輩若干引いてんじゃねえかよ

「お前が泣いてるところなんて見た事ねえし見たくもねえよー。」

ズドォンッ

人吉が双手刈りを決めて一本を取つた
やつぱりことも原作と同じか…つまんね、俺が試合ぶち壊すんだつ
た。

「そろそろ俺は帰らせていただきます」

「あれ？柔道部には入んじゃないんか？」

「はい、今回は生徒会と阿久根先輩の実力を見に来ただけですから」

「へえー、じゃあ勝負しようや」

「は？」

「おーい！阿久根クンー！」こじる冬斗クンが勝負したいそーなん

やけどええか

「はあ！？」

「ええ、構いませんけど」

なんで阿久根もOKすんだよーまさか、さつきの恨みか！

「じゃあ、柔道服に着替えてきてな～」

何でこうなった！

「（ふふふ、実力見せてもらひで～冬斗クン）」

準備終了

「それでは、阿久根高貴対大嵐冬斗の試合を始めます～お互いに、

礼！」

「お願いします…」

「お願いします」

「それでは……始め！」

こ^{ゼロタイム}は無の時間からの背負い投げでゴー～していくか

パチンッ

と指を鳴らすそこで時間が止まる

俺は阿久根のそばに行つたところで時間を戻し腕を掴み一気に背負い投げで決める

ズドオン！

「つー？」

「なつ…！？」

「…！」

まあ、背負い投げつつっても、他人から見たらいつの間にか阿久根

が投げ飛ばされているとしか見えないだらつ

「…審判」

「あ…こ、この試合、大嵐冬斗の勝ち！」

「ふー、じゃあ着替えて帰りますよ。本気出すんじゃなかつた。」

「え、ちょ、ホンマに柔道部入らへん？」

「言つたでしょ、実力を見に来ただけだつてじやあ、さよなら～」

その後、俺は帰宅した今日は10人殺した。

それぞれの心の声

（鍋島）

何なんや、あの新入生は！？

いくらなんでも出鱈田過ぎるで！？

柔道界で全国レベルの阿久根クンを瞬殺つて有り得へんやろ！しかも阿久根クンのところへ行くまでのスピードが尋常じやなかつたやろ！まるで時間を止めたような……

（人吉）

最初俺はアイツを、どこにでもいる普通の通常だと思つていた
だが、剣道場でその気配にすら気付けなかつたり、今阿久根先輩と
勝負し瞬殺した実力を見ては通常だとは信じられない
アイツはいつたい何者なんだ？

それに、アイツが言つてた『計画』って何なんだ？

翌日、阿久根は生徒会に入つたようだ
さて、次はどう介入していくかな

今日は水中運動会の日だが、俺は体調不良で休みといふことになつてゐる。

「なつてゐる」というのは、本当は体調不良ではないからだ。
なぜ嘘をついてまで休んだかといふと今日は禊と会つために休んだのである

今は禊が現在進行形で潰している学校に向かっているところだ。

さて、どこかな〜禊は
まあ、こう探してはいるがそこいら辺にはボルトで貫かれた生徒や先生がいるわけで

かなりグロッキーなわけだ

ん? 何で俺は平気のかつて?

ふつふつふ、俺は中学時代こんなばっかり見ていたのだ。

「いや、どうせ死んでる奴のことはない

ドグシャ

たつた今生徒をボルトで貫いた楔を発見

「久しぶり、楔」

楔が振り向く

「『君は誰?』」

「やっぱ記憶のプロテクトかかってるね。成功してよかつたぜ、待てよ楔、今解くから」

そうして楔の記憶のプロテクトを解く。

「思い出したよ。久しぶりだね冬斗」

そう言って、楔が近付いてくる
そして、

グシュツ

球磨川の持っていたボルトが俺の頭に突き刺さる

「あれ? 死んじゃった?
誰が死んだって?」

俺が球磨川の後ろの現れる

ん? お前は死んだんじゃないかって?

はつはつは、あれは俺が夢の夢で見せた偽物さ

「夢の夢かい？」

「ああ。そうだ。ちなみに、記憶プロテクトもそれでかけた
「ふうん、まあいいや。近いうちにそっちに行くね？」

「また一人で暴れようぜ。じゃあな禊。また今度」

「うんじやあね。冬斗」

そして俺は家に帰った

ちなみに、禊の最新電話番号とメールアドレス教えて貰った

喜界島もがなが生徒会に入った。テレレレッテレー。

裸とい冬斗（後書き）

球磨川さんのは冬斗には、『』をつけません。

風紀委員とダメの力

現在俺は普通に学園生活を送っているのだが今日は風紀委員▽S生徒会諸君らしいまあ、原作見てるから知ってるけどね（笑）つまり、放課後までお役御免ということだいやー、楽しみだなあめだかの乱神モード

そして放課後

なぜか、俺が風紀委員の刺客に狙われていた。つで、携帯から着信。「もしもし、大嵐か？そちらに風紀委員いないか？生徒会が狙われてこらるしい」「会長さん？どうごじますか。俺あんたらの仲間じゃありませんよ？」「話は後だ！今から助けに……」「来なくていいです。俺一人で何とかなります。」「そうか。ならば怪我をするなよ。」「がんばりますわ。終わったら生徒会室に行くんでよろしく。」「ああ。すまない」

つと電源を切る。そして田の前の相手に向を直る。

「あんがとさん、待つてくれて。」

「今から倒す相手には、多少氣をつかつてやらんとな

「紳士だね～。つま、俺の前じやあ無力だけど。」

そう言つて、戦闘を開始する。男は、刀で正面からやつてくる。それを俺は軽く避ける。

そこから、連続切りが来るが、全て紙一重で交わす。

「なあ、俺攻撃してもいいよな？」

「来るなら来い！」

「いいね、熱血嫌いじゃないよ。行くぞ、神の皇帝カミノヒンペイ3倍

そして懐から改造トンファーを出す。向こうは相変わらず剣で来るが、今回は、トンファーで剣をはじいて攻撃する。しかし、何か鋼鉄のようなもので守られ当たらない。続けて連続蹴りを食らわせるが、どこからか剣をもひ一本繰り出して、切る。

ブツシャー——

つと、鮮血を撒いて倒れかけたのは男のほうだった。

「つ貴様何をした。」

「何もしてねえよ。したのは、俺が切られた痛みをあなたに変えただけだ」

「う。俺は苦痛吸收ペイントラクションを使ったのだ。

「あんたには敬意を評して最強の技で終わらせてやる。」

そつ言つて俺が放つたのは、

「“X BURNER”」「

刹那、炎が辺りを覆いつくした。男は死んだが、大嘘吐き（オール
ファイクション）でもとに戻しておいた。

生徒会室前

「そんなものをここで爆発させれば、貴様もただでは済まないぞ！…

「さーて、どうだらうな？」

え？ ちょっと待てよ

確か雲仙が爆発させるのって炸裂弾だよな？

オイイイイイイイイイイイイイイイイ！…！…！

ちょっと待てえ！

ちょっと！ タンマ！ 善吉たち助けないと、え～っとあ～そうだ！ “苦^ペ
痛吸收” 善吉たちの痛みを俺に！

ドオオオオオオン！

「風紀委員会の制服、白虎のお蔭だ
スーパーホワイト

これ着てればダンプにはねられても大丈夫だからな
ハハハ

連中は大方、爆風にでもやられたか？」

ガラツ

瓦礫の中からめだか達が出てきた

「アレだけの爆発の中で……ウソだろ」

「簡単なことだ

まず近くにあつた花瓶の水をかけ不発するようにして

その後出来る限りのボールを部屋の外に蹴り飛ばした

だが私は爆発よりも爆風の方が危険だと思い、こやつらをロッカーの中に入れた

だがそれだと誰かが外に出てロッカーの戸を閉めなければならぬ
それで私がロッカーの戸を閉めた訳だが、何故善吉たちが怪我をしてないかは分からん。。

「な!?」

「驚いてんじゃねえよ。雲仙先輩？俺が痛みを肩代わりしたんだ。」

そうやつて俺が瓦礫の中から姿を現す。雲仙はおろか、めだかまで驚いている

「ありがとう、大嵐同級生善吉たちを助けてくれたことに感謝する」「たいした事はしてねえよ。俺は善吉を助けたんだ。周りはついでだよ。それよりはなしがあんのは雲仙てめえだ。何で俺に変な奴送ってきた。倒したから後で部屋の前見ときな。」

そして俺は、その場に崩れた。

「流石はバケモノだな

だがそんな事をしても俺を殴ることはできねーんだろ？」

お前はすべての人間を救いたいって言つてたじゃねーか
ハハハハハハハ！」

「……うるさい

「ああ？」

「……哀れなことだ

貴様もかつては人間の生前を信仰する心優しき美少年だったに違
いない

情状酌量に値するだけのきつかけがあつて
そのような残虐無比な性格を帶びてしまったとしか考えられん
しかし、だからと言つて
私は貴様を許さない！！」

グオツ！

今回雲仙は最悪な敵を回してしまつた。

怒り乱れる神（黒神めだか）を

「雲仙二年生、貴様の言う通りだ

私と貴様はそつくりだよ

私も貴様と同じで、自分を正しいと思つたことなど一度もない
もつといい方法はなかつたか

ちゃんと他人の役に立てているか

起こりうるすべての可能性を考えたか

誰かの悲しみを見落としているか

気付かぬ内に易きに流れていなか

人に助けることに慣れてしまつてはいけないか

いつだつて迷つてているしつだつて怖い

私は正しくなんかない！

正しくあらうとしているだけだ！！！」

「ハツ！どつちだつて大して変わんねーだろ？が！」

「貴様にはわからんだらうな雲仙一年生

だが私は貴様ほど大層な信念など持ち合わせていない

少なくとも大切な人達を傷つけてまで貫く信念はない

「ケツ！」

勝手に俺に俺を悪人みたいにしてんじゃねーぞボケ！！！」

バラララララ

「まだ火薬玉を持っていたのか

貴様は私の聖者つぶりが気に入らないのだろう？

ならばガツカリさせてやろう

私が怒りにまかせて人を傷つけるつまらない人間だと知れ！！！」

ドガツ！

バキッ！

ドンッ！

めだかが雲仙を殴り飛ばした

たつた三発のパンチがダンプよりも強いのかよ！！！

だが雲仙も立ち上がり

「はあ…はあ…

俺は風紀委員の看板背負つてんだ

ここでめだかをしょっ引かなければ…

正義じやねえ！！」

(。 。)

雲仙

アンタは男、いや…漢だ
でも、度が過ぎていいぞーでもかつてええ。もつもまでの俺にし
たことチヤラな

雲仙はめだかに突っ込んでいった

ドガッ

やはりめだかに殴り飛ばされてしまった
だが…

グッ

「？」

「今お前を縛つてんのは鋼糸玉アリアードネ

いくらお前でも切れねーぞ

正しい正しくないとか言う前に正義は必ず勝つんだよ…」

「アーリアードネ

？地響き？いやこれは…

「糸の方は頑丈でも校舎の方はそれほど頑丈ではなかつたようだな」

「ま、まさか…」

めだかが校舎」と引つ張つているのだ

「私は生徒会長だぞ？」

学校の一つや二つ、動かせんでどうするー。」

גָּדְעָן

「皆、この件が終わつたら
生徒会腕章を返してくれ」

そしてめだかは雲仙の前に立つ

確かに戦いには負けたが勝負には負けてねーぞ

「なに?」

「今でも俺は人間が大嫌いだからな
この信念は曲げるつもりはねーよ」

「ならば、私は人間が好きだ

ପ୍ରକାଶକ

「分かつた

アーティストによる書道の世界

ガシツ

「離せ

貴様ら、巻き込まれたいのか？」

「そりへ、巻き込まれたいの」

「やり過ぎだぜめだかちゃん」

「何処までも付いて行きますから」

「（あのバケモノを一瞬で止めた）こつは一体…？」

さて、そろそろ行きますか

そして、俺は帰つて行つた。

後日、理事長室で

「やはり大嵐君は異常アブノーマルを持つていますねえ

雲仙君がリタイアして、代わりに黒神君を入れようと思つていま
したが

大嵐君も入れたいですねえ」

「どっちにしても、あたしは気に入ってるよ~
冬斗のこと」

「まあ、なんにせよ

後日、ここに来てもらいましょうか
私が実際に見て決めます
それでどうでしょうかね

袖ひやん

冬斗の知らぬところで彼が巻き込まれようとしていた

嫌だよ面倒なのに

ちーす

みんな大好き冬斗です

今は理事長室に呼び出されてめだかと一緒に向かっているところです
けどやー、こないだ生徒会助けたからさめだかがめちゃフレンドリー
ーなんだよね~

生徒会はいらないかとか、めだかと呼べとか。ハア、面倒だ。

そして理事長室

「いやははや、先日は大変立つたようですねえ」

「ええ、まあ、私もまだまだと言つことでしょ」

「さつさと本題に入つたらどうですか？俺達を呼び出したのは、そ
んな世間話をするためじゃないでしょ？」

「まあ、さう焦らずにあなた達はどうして天才がいると思ひますか
？」

「理事長、この世に天才などいませんるのは努力家な人間です」

「俺はにんげんをみくだすためにつくられた、と思つています」

「ふむ、考え方は人によつて違いますねえでは次はこの6つのサイ
コロを振つてみて下さい」

そして俺達はサイコロを振る

めだかは原作と同じくサイコロが一列に積まれた状態になつた
因みに俺はめだかの結果を見ながら振つたのでまだ見ていない
俺は…

ナニコレ？

サイコロが“外”の字をかたどつて粉碎されている。

何でだよ

「これは興味深い結果がでましたねえ私は何故天才がいるのか？それを研究しているのですそして、人工的に天才を作ろうという計画があるのでその名もフラスコ計画」

「何が言いたいのですか？」

「君達にもフラスコ計画に加わつて頂きたいのですよ実はさつきサイコロを振つてもらつたのは異常^{アブノーマル}であるかそうでないかを確かめる為なんです。ですが、これで分かりましたあなた達は明らかに異常^{アブノーマル}何です！」

しかし、めだかは即答で、

「私は遠慮させていただきます私は天才や才能などに興味はありません

せん

「理事長、俺も面倒なんでバスで」

「つまりあなたも加わるつもりは無いと言つ」とですか

「そうです」

「分かりましたもう退室して構いません」

「それでは、失礼します。行くぞ冬斗」

「すぐ行く黒神。そうそつ理事長、言つておきますけど……ねー」

ドドドドス！

俺は、理事長に向かつて、時雨　　流のとある型を使用する。

「あまり人のことを嗅ぎまわらないでもらえますか？面倒なんですよ…」

超電磁砲発動！
レールガン

ヒヨイ、ズガーン

「この十三組の十三人の皆さん、再起不能になりますよ？」

「！？（バカな！いくらなんでもたらめ過ぎる！裏の六人がいな
いとはい、この7人を一瞬で行動不能にさせるなど！）わ、分か
りました君を詮索するのは止めましょう」

「物わかりがよくて助かりますでは、失礼します」

俺は帰りに環境保全活動（不良殺し）をしながら帰つていった。

「理事長、俺の“反射神経”一でも動けなかつたぞ
オートバイロット

「ふう彼の力は強大過ぎますねえ私の手に收まりきるかどうか…」

「icas」計画= 僕纏うる。同類語だから覚えていた（前書き）

ただいま日本×シリア戦見てま ス

「クラス」計画 = 僕纏わぬ。同類語だから覚えとけ

今回の最初は生徒会の会議から

「さて、今日の議題は冬斗の件だ今回は雲仙一年生にも来てもらひつた」

「あいつは規格外過ぎる。あいつには風紀委員でも指折りの奴を送つたんだがそいつから聞くと一瞬で片付けやがつたらしい。しかも変な炎で」

「しかも、雲仙一年生の破裂弾による爆発でも無傷だつたどこか、貴様らの痛みを肩代わりしたらしい」

「そんな馬鹿な！彼は一組ですよ？！めだかさん

「何らかの方法を使つたと考えるしかあるまい。」

「あいつはお前らと敵対する気満々だぜ？」

「じゃあどうするんですか？」

「仕方あるまいひどく気は進まんが私の本気を思い出すためだ明日、兄貴を訪ねてみるとしよう」

「あの人との二行ぐのかめだかちゃん」

「善吉、一緒に来てくれ

「ああ、分かつた。」

俺は今、学園内を散歩している。誰かが俺を噂している気がするん?何だこの無駄に大きい威圧感は

「跪け（ヒザマズケ）」

「この正に唯我独尊みたいな言い方は……」

「ふむ、姿勢がいいなお前には王たる俺の配下になる素質がある」

都城王土

他人は俺の役に立つため生まれてきたと豪語する史上最大の俺様主義者。俺の大嫌いな野郎だ。

「噂通りの王様つぱりですね。都城先輩」

「誰だ?」

「唯のじがない規格外ですよ王様」

「そうかでは規格外よ跪け（ヒザマズケ）」

「夢の夢、幻想殺し（イマジンブレイカー）」

幻想殺しの幕を俺の周りに張り、言葉の重みを打ち消す。

「何かありました?王様?」

「貴様、中々やるようだな

都城は少し感心しているようだそりゃそりだろ今の俺は抵抗や踏ん張つていいと言つたりはない全くの自然体だ

「そりゃあどうも

…………近づいてくる気配が一つ

めだかか

善吉が立ち上がるうと力を入れるが無駄だ
今のお前じやあな

「おつと

革命を起しそうなんて思わない方がいいよ
都城王土の真骨頂『言葉の重み』

誰も王の命令には逆らえないんだからね

行橋未造

彼、いや彼女の異常は受信感度
アブノーマル

脳が活動する際に流れる電気信号が体外に漏れ出了電磁波を皮膚で
受信することで人の考えを読むことができる
だが、感度が良すぎるため受信する情報の選択ができない
痛みや悲しみも感じてしまうのである
つまり、長所でもあり短所でもあるといふことだ

「め、めだかちゃん……！」
お、めだかが来たか

「来たか…」

「都城三年生、善吉がだいぶお前に話になつたよつだな」

「だつたらじづる?」

「善吉を返してもらおう」

「ふん、やうかならば平伏せ』ヒレフセ』」

ドオオオオン

めだかが文字通り地面に平伏した

「くつ…」

「羨ましいな自分よりも上の存在がいるとほ王たる俺にはない体験だ」

……なんと云つ俺様主義。やつぱり俺こいつ嫌い

「俺はお前に惚れた一田惚れだ！」

「あつ……え…？」

そういう事を堂々といふか?

めだかもつ訳分かんなくなつてんじやん

助け舟出すか

「あのー、いい雰囲気になつてるとこ悪いんですけどやつひ返しておけばどうですか?」

「ふん、まあ良からう黒神めだか、おれたち異常の下に来い通常などに口くちが存在を消費するな。明日の日の出前、この学園の屋上に来い」

そう言つて都城は去つて行つた

「全く、破廉恥極まる男がいたものだ不本意ながらこの逢いに来ることは、

応じ生徒会長として更正してやる必要があるな」

「それじゃあ俺はそろそろお暇をさせていただきますか」

「残念ながらそっぽいから冬斗。貴様には聞きたいことが山ほどあるのだ。一緒に来てもらおうか?」

「嫌、めんどい」

「拒否権は無い」

「お願いだから許して」

「だつたら來い」

そうなりますよねーでもここで捕まつてたまるもんですか

「なら、力ずくでも突破しますよ」

「やれるものならやつてみうつてんだー冬斗ー」

「あんまりでしゃばるの止めねえぞ?・善吉。“無の時間”(ゼロタイム)」

時間を止めて俺は返った。

家にて

「何でいんだよ

ま、まさか俺の命を狩りに来たのか!…まあこー…」
「…

「いや、全くの別件じゃ

なんだよびっくりするだろー

「お主が勝手に勘違いしたんじゃ」

「で、その要件って何?」

「実はな、お主をこの世界に送った後に分かったことなんじゃが、
お主には生まれつき過負荷マイナスがあることが分かつたんじゃ」

「マジですか? 特典意外に?」

「マジもマジ、大マジじゃ」

「で? で? どんな能力なんだよ」

生まれつきとこいつとでおさらい気になる

「つむ、それで能力じゃがはつきり言つてかなりエグいぞ
相手に痛みを与えるの能力じゃ相手の過去の傷とお主の過去の傷
を一気に相手に波動として送るもんじゃ」

は? 何それ?

「しかも入切が可能、強弱が調整、体の心か体か、どこに痛みを与
えるかの選択ができる」

マジかよ

規格外な俺らしい過負荷マイナスだな

「つーことは古瀬の傷を開いてさらに俺の“あの傷”を『えぬ』」と
ができるのか?」

「可能じゃ

「可能じゃ

うわー

そして次の日

面白くない！原作どおり！今はあの伝説のシーン。俺は今“あの傷”のことについて調べている

「」めんなさい

「これにて一件落着ウ！」

“あの傷”に関してのダウンロードも終わった、さて、そろそろ行きますか

「いやー、いいお話ですねえ」

「！？」

「死闘を繰り広げた相手は改心し監さん仲直りでめでたしめでたしでもこれで終わりますかね？」

最後に最強のラスボスが出てくるって物語では王道なんですよ

「では、そのラスボスとやらは矢張り貴様か？冬斗」

「まさか、冗談は止せよ黒神の完成^{ジ・ヒンド}なんて、相手にしたくない。だから…」

俺は、あのタバコ神父の巨人を出す

「行け！魔女狩りの王！」^{イノケンティウス}

「ガアアアアアアアア！」

イノケンティウスはめだか達の方へ向かっていく

「それじゃあ、頑張れ！」

「おい！待て！」

何か聞こえるけど気にしない

そして俺はエレベーターで負け犬組と裏の六人が戦闘中の階まで行く
そこでは球磨川が全員を螺子で串刺しにしていた

「久しぶりだな禊、いや、球磨川先輩って呼んだ方がいいか？」

「ううん、今まで通り禊でいいよ。だって僕たち友達じゃないか」「ジョークだよ」

その頃めだか達は…

「くつどうすんだよめだかちゃん」

「慌てるな形がどうであろうと火だ。火は消火すればいい」

プシュー

めだかは近くにあつた消火器をイノケンティウスに当てる

「ガアアアアアア！？」

イノケンティウスはいきなりのことで怯んだ

「（そもそもイノケンティウス消すか）」

イノケンティウスは只の火となり、やがて消えた

「いつたい何だつたんだ」

「分からんとにかく、地上に戻るぞ」

場所は戻つて冬斗＆球磨川

「来たな

「？」

チーン

めだか達を乗せたエレベーターが到着したようだ。襷が口調を戻し、

「『久しづりめだかちゃん僕だよ』」

「ツ！？球磨川！？」

そして、過負荷編マイナスが始まる

因みに過負荷の名前は绝望にした
マイナス テスペラード

「クラス」計画 = 勝った。同類語だから覚えた（後書き）

日本2 - 1で勝った――――――

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1860y/>

やりすぎの転生者

2011年11月27日21時54分発行